



ウェールズ大学留学記

谷口 滋 次*

1973年秋より2年余英国ウェールズ大学カーディフカレッジ(University College, Cardiff)に留学する機会を得た筆者は、滞英中研究生活のみならず、日常生活および英国各地への旅行を通じて、少しでも英国への理解を深めようと努めてみました。もとよりこの程度の期間ではほんの一部を見聞したにすぎませんが、大学生生活を主に2,3印象に残ることを記してみます。まずウェールズという今日でこそ、最近の数度のラグビーの交歓試合などで日本の人々に知られるようになりましたが、その名前だけでそれ以上のことを知る人の数はまだ少ないようです。現在日本から電器および化学関係の3社がカーディフおよびその付近に進出しており、これらの企業は近年までこの地方の主要産業であった石炭業の閉鎖にともなう失業者に職場を与え現地の人からは好感を持たれております。

カーディフカレッジは小さいながらも理科系・文科系から芸術学部や神学部までを備える総合大学ですが、ウェールズ大学を構成する1つのカレッジというわけで University College という名で呼ばれます。ここでも英国の他の大学と同様にアフリカおよびアジアの各国からくる外国人学生の割合は多く、特に大学院ではこの傾向が強く、筆者の滞在した Department of Metallurgy and Materials Science では11人の大学院生のうち4人は外国人でした。学生達は「学位より早くお金を儲いだ方が良くからだ」といいますが、日本より割合の少ない学士号所有者の社会的地位が高いのも一因のようです。ちなみに金属関係の学科の卒業生は年間約500人で日本の約2000人に比べると大きな差です。これが金属関連工業において日本にかなわない理由ではないかと真剣に考える学生もおりました。教養課程がなく、専門科目を3年間

で勉強し、講義数は少なく実験が多く、講義で習ったことをすぐ実験で確認するという効率の良い方法をとっていること、それから Tutorial と呼ばれる個人教育制度があることなどから平均して比べると彼等の方が質が良いようです。学生数が少ない一例を挙げると、筆者の滞在した学科では毎年11人の教官に対して卒業研究をする学生数は1桁ですので、卒業研究を受け持つ教官とそうでない教官があることとなります。教官達は実によく学生の面倒をみまいた研究熱心で、必要な時には自分でも試料を研磨したり、顕微鏡をのぞいたりして、疑問を解決するように努めています。一方日本では企業で激しくまた巧みに再教育あるいは訓練されるので、ようやく卒業した人でも立派に使いものになっていると見えます。一般の学生の生活は、忙しいといっても週末は殆んど勉強せず、スポーツを楽しみ、酒類を飲みに行ったり、ダンスをするのもさかんです。幸いなことに設備にめぐまれており、運動場は一度にサッカーが10試合もできる広さですし、学生会館内には大食堂を初め、バー、ゲーム室、図書室、学習室、音楽室、テレビ室、会議室、シャワー、洗濯室など各種の機能が備えられており、極端なことを言うところ、教室と学生会館を往復するだけで生活していけるのです。また大学の所有する立派な劇場があり、殆んど毎日何か上演されています。学生の入場料は比較的安く一般の人でも多数来場します。日本の映画も年に数回上映されます。このように学習・スポーツ・娯楽などのための環境は日本の大学よりめぐまれており、大多数の学生はそれを当然のように思っていますが、これらは学生自治会の全国的な組織(National Union of Students)がありそれを中心として地道な努力を重ねて獲得したものです。自治会の委員長になるのはかなりの名誉とみえて歴代の委員長の名前が学生会館に飾られています。

*(Shigeji TANIGUCHI) 大阪大学, 工学部, 冶金工学科, 助手, Ph.D.

一方研究の主力を担う大学院生は講義が殆んどないため実験の都合に合わせて適当に登校してきますが、午前のお茶の時間に殆んど全員そろっていますので、皆んな真面目に來ているようです。そして実験の都合でない限り夕方5時に帰りそれを3年間（修士号を取る場合は2年間）続けます。3年以内で学位論文を提出する人は少なく、3カ月程度の裕余はありますが、それでも出せない人は就職して昼間は働き夜書いて半年から一年かけて提出するのが普通です。大学院生の全員が奨学金を支給されており、大学、会社、および他の財団のような組織が出すものがあり、出所によらず等しい基準で支給されています。普通に生活していけるだけの額はありますので大半の学生が比較的若しくても結婚しています。ここでは「学生の分在で……」ということは聞きませんし、卒業後の就職については未定で不安定であるにもかかわらず、あまり気にしていません。

1974年9月にはスコットランドのスターリング大学で開かれた British Association for the Advancement of Science の会合に参加しました。これは英国のどこかの大学で年一回開かれる教育と親睦の催しで、誰でも比較的安い費用で会員になることができます。約一週間のプログラムから成っていて、午前中は講演会、といってもかたくるしい学術講演ではなく、いろいろな分野における興味深いトピックスを、いろいろな層の人々にわかりやすく解説するものです。一例を挙げると、石油危機が叫ばれる折でしたので World Energy Crisis とか Solar Energy and Its Possible Application とかを聞きました。討論は活発で、そうとう年配の人でも元気に発言しているのが印象的でした。午後は近郊の工場や研究所などの見学で、これもいろいろなコースがあり選択に迷うくらいですが、National Engineering Laboratory、精油所、ダムと発電所を見学し、さらに北海油田開発のために建設中の巨大な Oil Rig を見学しました。強い北海の風が吹きつける海岸で聞く技師の説明のはしばしに、英国の人々が北海油田にかける期待にはなみなみならないもの

があるのを感じます。まして最近安くなる一方のポンドをみると、大油田を開発して再び英国の国力が上昇するよう望まずにはられません。また午後の催しでは純粹の観光旅行もあり、イングランドやウェールズではあまり見ることのできない険しい山々や澄んだ湖を見物しました。この風景のちがいは英国の歴史にみられるイングランドとスコットランドの長い抗争をも思い起こさせます。皮肉なことに、イングランド銀行はスコットランド人によって創立され、その数年後復讐としてスコットランド銀行はイングランド人によって創立されたことそれからスコットランドの葬式はイングランドの結婚より良いという諺を愉快そうに説明したガイドの話しぶりが思い出されます。夕食後は肩のこらないものばかりで、映画・コンサート・スターリング城でのレセプションなどがありました。このようにして一日のプログラムはすぐすぎてしまいます。一日二日すると見なれた顔ができてきて話がはずみます。一見話しかけにくい印象とは逆に話が始めるとよくしゃべります。そしてかなり巾広い話題を持ち、テレビ番組の話から政治の話までひととおりに楽しめるのです。

一般の人々の日常生活を見てとても感心することは、少数の年少者の例外はありますが、実にマナーが良いことです。これは他人に迷惑をかけないための行儀作法だけでなく、別の意味も含みます。例えば、石油不足の時には政府のよびかけにすぐ応じて、電気を節約するために電燈の数を減らしたり、自動車の速度を下げたガソリンの節約に協力し、日頃政府批判をさかんにやっている人でもすぐ協力するほど徹底したものです。それにひきかえ、なりふりかまわないような商法で売りまくり、最近ECからもしめ出されそうになっている日本製品を見るとマナーの良さと経済活動には葛藤があるのかなと疑問に思わずにはられません。これまで多数の日本人が英国に留学し暖かい雰囲気の中で勉強したことと思います。そして今度は日本がこれまで以上の留学生や研究者を英国より受け入れる努力をすべきであると思われます。